ウイグル語サマースクール参加記

山﨑　典子

はじめに

2012 年 6 月、7 月、筆者はクルグズ共和国の首都ビシュケク市内で、現代ウイグル語の夏期集中講座（以下サマースクール）に参加した。本稿は、当該サマースクールの概要を、個人的な感想を交えながら紹介するものである。

1. サマースクール参加の経緯

1.1 きっかけ

筆者が当該サマースクールの存在を知ったのは、2012 年 4 月上旬、中央ユーラシア研究会のメーリングリストを通じてのことであった。転載元の英語メールによれば、同年 6 月 11 日から 7 月 20 日にかけて、クルグズ共和国の首都ビシュケクにある American University of Central Asia（以下 AUCA と略記、現地ではロシア語表記にもとづき「アウツァ」というふうに発音される）において、中央アジアで話されている諸言語――ロシア語、クルグズ語、ウズベク語、タジク語、ダリー語、ウイグル語――の夏期集中講座が開催されるという。参加申込書の提出期限は 4 月 20 日と間近に迫っていた（ただし、これはホームステイ希望の場合であり、寮滞在希望者の期限は 5 月 1 日）。なお、現地到着後に判明したことだが、AUCA によるサマースクールの開催は、実は 2012 年が初めてであったという。

中国ムスリムを主な対象として中央ユーラシアの近現代史を研究している筆者は、当時博士課程在籍 1 年目で、ちょうどウイグル語学習のための短期留学先を探している最中であった。その候補として当初考えていたのは中国の新疆ウイグル自治区や北京の教育機関だったのだが、旧ソ連地域における中国ムスリムの歴史や文化にも関心を抱いていたことから、当該サマースクールへの参加を即決したのである。

1.2 準備上の注意

サマースクール参加申し込み時における AUCA のスタッフとのコミュニケーション言語は、英語でもロシア語でもかまわない。2012 年の担当者であった若いアメリカ人男性は、中央アジア滞在歴が長く、流暢なロシア語を話す。現地のクルグズ人スタッフも、皆英語が堪能である。ただし、当該サマースクールがおそらくアメリカ人の学生を主な参加対象としていることから（実際に、参加者 5 名のうち筆者以外の 4 名はアメリカ人であった）、現地でのオリエンテーションなどは基本的に全て英語で行われると考えていい。

ところで、出国前の準備段階で、特に注意すべき点は二つある。第一に、参加費 3000 米ドルの支払いは、時間的、金銭的に余裕をもって行うことをおすすめする。AUCA からのメールに添付された英文の参加費請求書を日本国内の金融機関に持参して手続きをするのだが、国際送金には予想外に時間がかかる。そのうえ、送金手数料、航空券代、海外旅行保険代金などの経費は参加費には含まれないので、注意されたい。第二に、日本学術振興会（以下、学振）特別研究員に採用されている場合、海外渡航の計画書、すなわち「特別研究員海外渡航届」、及び「研究指導委託申請書」を出国一ヶ月前までに提出しなければならない。後者は、まず日本国内の所属機関に提出し、研究科からの承諾を得たうえで、学振に送ることになっている。筆者が所属する東京大学大学院総合文化研究科の場合、学内会議の開催が時期的に遅かったため、全ての書類を揃えることができたのは出国日まで一週間を切っていた。学振の注意事項をよく読み、早めに準備したほうがいいだろう。

2. サマースクールの概要

ここでは、ビシュケクでの宿泊先や AUCA の学習環境を紹介したうえで、当該サマースクールの特色やウイグル語の授業内容についてくわしく述べる。

2.1 宿泊先と学習環境

前述したように、サマースクール参加者は、申し込みの段階で宿泊先として寮あるいはホームステイを選択することになっている。いずれを選んでも参加費は変わらない。だが、両方に滞在した経験から言えば、ロシア語とクルグズ語の受講者以外は、寮を選択したほうがよさそうである。このように考える理由は、大きく二つある。

第一に、AUCA 側がホームステイ先の家庭を紹介できない場合があるからである。ウイグル人家庭でのホームステイを希望していた筆者の場合、クルグズ共和国内での居住人口が

少ないウイグル人の受け入れ家庭を探すことは困難であるというAUCAからの説明を受け、結果的にクルグズ人家庭に滞在することになった（ただし、一家の事情により、帰国1週間前に寮に移った）。第二に、各言語担当の講師と受講生の多くが寮滞在を選択しているためである。短い寮滞在ではあったものの、授業時間外もウイグル語講師とウイグル語で会話する時間をもてたこと、中央アジア近現代史を専攻するアメリカの大学院生のほかに、タジキスタンから来ていたタジク語講師と交流をもてたことは、筆者のウイグル語会話能力の向上や中央アジアに対する理解を深めるうえで、非常に有意義であった。なお、寮の設備は古いが、掃除が行き届いており清潔である。基本的に2人1部屋であるがスペースは十分に広く、簡易キッチンを利用することもできる。

寮から徒歩3、4分の距離に位置するAUCAの校舎はビシュケク市の中心部にあり、国立歴史博物館やドゥボーヴィ公園に隣接している。同市の目抜き通りであるチュイ大通りからもほど近い。このように交通の便がよく、寮や学校の近くに小さな市場やスタローヴァヤ（大衆食堂）も複数あるため、日用品の買い出しや食事に困ることはないだろう。校内にも小さなカフェテリアがあり、手頃な価格で中央アジアやロシアの料理を楽しむことができる。校舎は明るい雰囲気でありながらも、教室内は周囲の喧騒を忘れるくらい静かで、学習環境としては申し分ない。

しかし、AUCAの施設の利用条件に関して残念なことが一点あった。それは、サマースクール受講生用のIDカードの作成が大幅に遅れたために、守衛に身元を怪しまれて入館を拒まれたり、図書館を利用できなかったりと、さまざまな不便が生じたことである。とは言え、後述するように、初のサマースクール開催年であった2012年の反省を踏まえて、現在AUCAが翌年以降のプログラムを更新していることから、2013年にはこうした問題は改善されるだろう。

2.2　サマースクールの特色

授業初日の午前中に、受講者、及び各言語を担当する講師が集められ、AUCAのスタッフ数名によるオリエンテーションが行われる。2012年に開講された言語と受講生の人数は、以下のとおりであった：ロシア語1名、クルグズ語1名、ウズベク語1名、タジク語1名、ウイグル語1名。筆者を含め大学院生は2名、ほか3名は学部生であった。続いて、当該サマースクールの特色を列挙しながら、その全体像を紹介したい。

当該サマースクールの第一の特色として、現地に滞在しながら中央アジアの諸言語を学ぶことにより、中央アジアの生活や文化に対する理解を深めることができる点が挙げられよう。もちろん、中国、アメリカ、あるいは日本国内の教育機関などでもこれらの言語を学ぶこと

はできる。だが、現地の生活を体験しながら、生きた言語に触れることのできる機会はやはり得難いものであるし、現地の人々との交流や新たな友人との出会いは大きな魅力である。ただし、2012 年に限っては、AUCA によるイベントなどの企画が実施されずに終わってしまったため、こうした機会を自ら作らねばならなかった。

第二に、講師は皆、担当する言語のネイティブスピーカーである。筆者が受講したウイグル語の講師は、クルグズスタン出身で、現在はカザフスタン共和国で教鞭をとるウイグル人女性であった。また、ウズベク語の講師がクルグズスタン南西部の都市オシュ出身のウズベク人女性であったため、ウズベク語受講者の女学生は、初めの数週間オシュにある講師の実家に滞在し、ウズベクの伝統文化や現地事情を学びながら授業を受けていたという。講師がネイティブスピーカーであり、中央アジアの歴史や文化に精通しているからこそ、このように貴重な経験をすることが可能だったのだろう。もっとも、2012 年は各言語の受講者が 1 名ずつであり、授業がマンツーマンの形で行われていたために、さまざまな形で融通が利いたという事情があったことを指摘しておきたい。

第三の特色は、上述のウズベク語の事例からもわかるように、各受講者の要望や講師からの提案に応じて、柔軟に学習スケジュールを立てることができる点である。AUCA の説明では、原則として月曜日から金曜日、午前 9 時から午後 2 時まで授業を行うことになっていたが、筆者は講師と相談の上、月曜から木曜、午前 8 時から午後 2 時まで講義を受け、金曜日は自宅で復習をするという形式を採用することにした。そのため、週末の時間を利用して、ドゥンガン人（中央アジアに移住した中国ムスリムの末裔）が多く住むクルグズスタン東部の町カラコルでの調査や、ウズベキスタンのアンディジャン出身の友人宅への訪問を実現することができた。さらに、規定の授業時間外にも、講師とともにビシュケク市内にあるウイグル文化団体、ウイグル料理専門店、新疆からのウイグル人商人が集うバザールなどを訪れ、教室内で習った会話表現を実践する機会を得られたことは、筆者の学習意欲を大いに高めてくれたと思う。

このように、当該サマースクールは自由度が高く、和気藹々とした雰囲気のなか進められていったのだが、裏を返せば、各講師の裁量に任せられている点が多く、体系的な言語学習プログラムが保証されているわけではない。この点に留意したうえで、講師との相談や AUCA との交渉を積み重ねながら、快適な学習環境を自力で作り出していく努力が求められよう。

2.3 ウイグル語の授業について

これら当該サマースクールの三つの特色を踏まえたうえで、筆者が受講したウイグル語講

座についてより詳細に述べたい[1]。

まず、テキストとして用いられたのは、講師自身が執筆し、カザフスタンで刊行されている教科書であった。全 25 課からなるテキストの内容は、ロシア語による文法事項の説明と練習問題、応用力をつけるための読み物など多岐に渡っている。著者である講師の問題意識を反映してのことか、新疆の近現代史に関する文章が複数取り上げられていたことが印象的であった。また、上述したように、クルグズスタンのウイグル人コミュニティを訪問し、ウイグル語会話表現を実践するという課題のほかに、ウイグル語の歌謡曲を聞きながら歌詞を聞き取ってそれを覚えるという課題も課された。

次に、講師との会話は、授業中であるか否かを問わず、基本的に全てウイグル語であった。その理由は、筆者がウイグル語の初学者ではなかったため、また、講師が英語を話すことができなかったためであった。そして何よりも、筆者が短期間でウイグル語会話に慣れ親しむことができるようにという講師の教育的配慮からであり、必要時以外に英語やロシア語を話すことは禁じられていた。初めの 1、2 週間は講師との意思疎通に困難を感じたものの、ときには文法書や辞書を片手に持ちながら、幾度も講師の発言を聞き返しながらもウイグル語を話し続けたことは、発音の矯正や会話能力の向上に少なからず寄与したと感じている。ほかの言語の講師たちは英語で授業を行っていたようであるが、中央アジアの各言語やロシア語でコミュニケーションをとることを受講生側から提案すれば、それに応じてくれるはずである。

なお、授業中のウイグル語は全てキリル文字で表記された。これは、講師がクルグズスタンやカザフスタンにおけるウイグル語表記法に慣れていたためである。とは言え、講師は新疆で用いられているアラビア文字表記のウイグル語を読むこともできたので、筆者はアラビア文字での表記を希望したのだが、結局キリル文字表記が採用された。当初は、日頃見ている日本語、英語の辞書や文法書におけるウイグル語表記や転写法との違いに面食らうことも多々あった。しかし、「ウイグル語がさまざまな文字で表記されていること、その表記法や転写法にいまだ統一性がないことは、ウイグル人の歴史の複雑さを物語っている」という講師の言葉には納得するところもあり、次第にキリル文字表記のウイグル語に慣れていった。

最後に、講師が明るく開放的な性格だったこと、日本や欧米の研究者をよく知っていたこともあり、リラックスしながら楽しくウイグル語を学ぶことができた。同時に、旧ソ連地域に暮らすウイグル人の生活や文化に親しみながら、彼らが中国領内のウイグル人の歴史や現

---

(1) 中国領中央アジア (いわゆる「東トルキスタン」) 研究の動向、ウイグル語学習のための参考書や工具書類については、菅原純氏、及び新免康氏による記述 [小杉ほか編 2008:54, 267–271] を参照されたい。なお、ここには書かれていないが、日本語で書かれたウイグル語教材のなかで最も内容が充実しているのは、[菅原ほか著 2007] だろう。

状に対して抱く複雑な感情などをうかがい知ることもできた。これらの収穫は、それまで中国領内のウイグル人社会にばかり目を向けがちであった筆者の研究に、今後大きな示唆をもたらすに違いない。

サマースクールの課題と展望――おわりにかえて――

帰国後ほどなくして、AUCA から成績表、及びサマースクール全体に関するアンケートが送られてきた。さらに、11 月下旬に届いたメールには、アンケートの回答を参考にして改善策を練ったことが書かれていた。実際に、すでに AUCA のホームページに掲載されている 2013 年のプログラム情報を見ると、どうやらその通りのようである。たとえば、2012 年に完成した真新しい寮での快適な滞在が可能になり、初年には実現されなかった映画上演会や市内エクスカーション、同国北東部に位置する湖で多くの観光客が訪れるイシク・クルへの小旅行、現地の学生との交流活動なども企画されているという。また、講義期間が 6 月 10 日から 8 月 2 日と前年よりも約 2 週間長く設定されていることから、受講生は時間的に余裕をもって学習に取り組むことができるようになるだろう。

繰り返しになるが、現地に一定期間滞在しながら、しかも落ち着いた学習環境のなかで中央アジアの諸言語や文化を集中的に学ぶことのできる機会は、非常に得難いものである。この意味において、AUCA のサマースクールは、中央アジア研究を志す学部生や大学院生を中心に今後より注目を集め、高い評価を受けることだろう。そして、そこで得られたさまざまな知識や経験、構築されたネットワークは、新たな中央アジア研究の潮流を創出していく可能性を秘めていると言っても過言ではない。日本からも、より多くの若手研究者が積極的に当該サマースクールの門を叩くことが望まれよう。

参考文献・ウェブサイト

小杉泰・林佳世子・東長靖編 2008『イスラーム世界研究マニュアル』名古屋：名古屋大学出版会。

菅原純、アイスィマ・ミルスルタン 2007『Eling,Eling!』(2007 年度言語研修「現代ウイグル語」テキスト) 東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。

“Summer Language School,” http://www.auca.kg/en/sls, 閲覧日：2012 年 11 月 24 日。

（東京大学大学院博士課程、日本学術振興会特別研究員 DC）